

文化の原動力と人間形成

芥藤 武雄

一 文化の原動力は何かという問いの重要性

「文化の原動力と人間形成」というこの題名の意味は、文化の原動力とは何かを問い、この文化の原動力となるような人間を形成すること、従って文化の原動力を養うように人間を形成することである。それ故、人間形成ないし教育は文化の原動力を養うことを目的とする、ということになる。

日本は戦後、文化国家の建設を目指し、文化の創造を教育の目的として示したことは、次に考察する「教育基本法」によって明らかであるが、文化の原動力は何かについての深い考えが不足していた。私はこの文化の原動力は何か、という問いに決定的な答えを与えようとするものではないが、この問いへの世人の関心を喚起すべく若干の論述を試みるであらう。

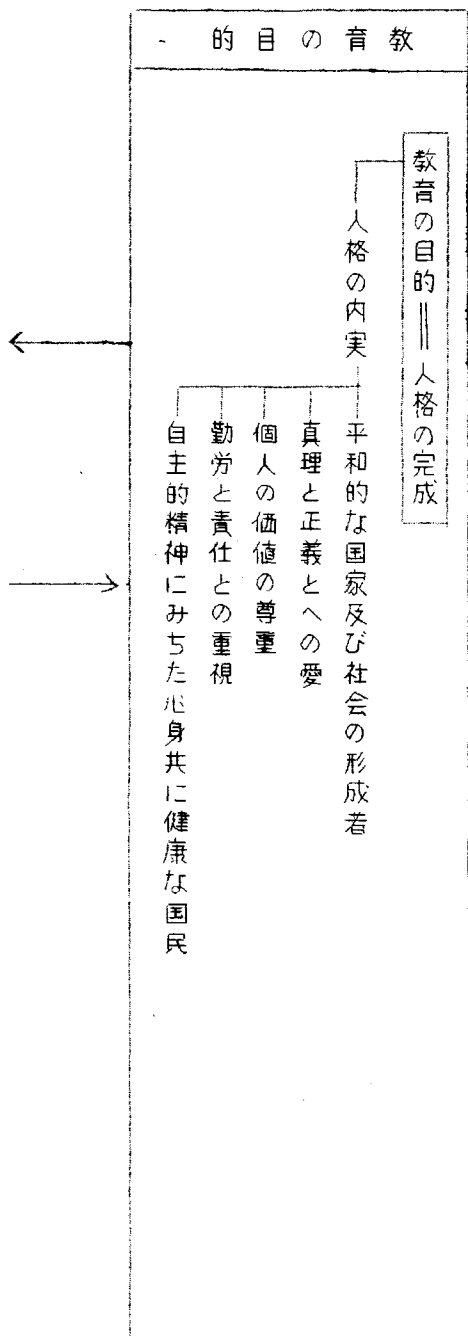
さて、「教育基本法」の前文の冒頭には次の如くに述べられている。「われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。」（傍点筆者）と。ここに文化国家の建設というわれらの目標と、その実現の根本としての教育の使命とが示されたのである。

ついで、そこには、「われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。」（傍点筆者）とある。これは教育の理念を示したものである。この教育の理念には、民族とか国家とかかないしその歴史とかの顧慮が殆どなく、祖国なきコスモポリタンの教育理念ではあるが、個人の尊厳、真理と平和の希求、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造、これらは常に妥当性をもつものである。ここにはつきり文化の創造が教育の理念と

(2) してうたわれている。

そして、「教育基本法」第一条は教育の目的を示している。「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。真理と正義とを愛することが教育の根本である」とをこの第一条は示しているが、この教育基本法が公布された当時から現在に至るまで、この点の強調が一般に乏しく、ただ個人の自由のみが力説され重んぜられた傾向を、日本の現実がもっていたことは否定できないことである。

「教育基本法」第二条は「教育の方針」を示したものであるが、それは教育の根本方法を規定したものである。それは次の如くである。「教育の目的は、あらゆる機会に、あらゆる場所において実現されなければならない。この目的を達成するためには、学問の自由を尊重し、實際生活に即し、自発的精神を養い、自他の敬愛と協力によって、文化の創造と発展に貢献するように努めなければならない。」これを前条の教育の目的との関係において分析すると次のようになる。



教 育 の 方 針

学問の自由の尊重
實際生活に即すること
自発的精神の涵養
自他の敬愛と協力

文化の創造と発展に
貢献すること

以上の如く、「教育基本法」の根本構造は、「教育の目的」から出発し(1)、この目的によって制約される「教育の方針」の諸契機すなわち教育の方法(内容と方法)を通じ、かくして文化の創造と発展に貢献することのうち(2)、教育の目的たる「人格の完成」を表現すること、というものである。その人格の内容は「教育の目的」において規定されているものである。

従って、教育の目的に合致しないものは、如何に各人が欲しても、文化に値しない。すなわち、平和的な国家及び社会の形成者育成に役立つもの、美しくても、感じがよくても、それがその限りにおいて眞実であつても、文化ではない。眞理と正義とを愛する精神を損うものは文化ではない。個人の価値を認めないような、あるいは、軽視させるようなものは、文化ではない。勤労と責任とを重んじないような、又、自主的精神のない、心身ともに不健康な状態に導くような傾向のあるものは、文化ではない。

これは、否定的な側面からの分析・明瞭化である。これを肯定的に言い表わすことは極めて容易である。すなわち、文化は、平和的な国家及び社会の形成者育成に資するものでなければならぬ、眞理と正義とを愛する精神を助長するもの、それを根源とするものでなければならぬ、などである。

すなわち、文化は、かかる精神ないし諸契機によって、創造され発展させられ、逆にかかる文化によって、かかる精神ないし諸契機が具体的に実現される。

以上の分析は、私の或る一定の立場からのそれではなくて、「教育基本法」そのもののもつ論理構造そのものである。だからこの分析は勝手気儘なものではない。これは、従って、私の意見ではない。

(4)

「教育基本法」における文化の概念は極めて広義のものである。それは、あらゆる学校およびその他の教育施設の教育内容に關するから、当然のことである。私が「文化の原動力」という場合の「文化」も広義の文化である。

「教育基本法」は十分なものではないが、しかし真理をもっている。真理と正義とを愛すること、ならびに人間の尊重、勤勞、責任等の重視は、形式的には、否形式的なるが故に、それらは永遠の真理であると言つてよい。ハイデッガーあるいはヤスパースならば、ここにあげられている諸々の精神ないし諸々の徳は、結局真理 (Wahrheit) の概念の下に包括するであらう。なぜなら、それらは、人間自身が眞実であること、すなわち主体の眞理 (根源的眞理) に従ならないからである。従つて、こゝみれば、「教育基本法」の根本は、眞理を愛し眞理を実現する人間の形成が教育の理念であり、目的であり、これが全教育実践ないし施設を貫くものであるということにならざるをえない。

私はかつて、一九六三年一月二日、ボストン大学において「*Philosophy of Education in Japan*」(日本における教育哲学)という題で講演したとき、日本国憲法と教育基本法とから話を始め、次に次のようなことを言った。「日本の教育基本法の原理そのものは理想的なものであったが、内容実質を実現することは極めて困難であった。それは形式的には完全なものであったが、その実質を当時の日本の人々がどう解したが内題である。教育基本法が制定された当時は、人向性の尊重ということとを、日本では主として、人向の自然性の尊重すなわち自然の要求の満足と日常生活に關する社会の要求の満足という意味に、一般に理解したのである。そのため眞の人向尊重の精神が、自然性という側面の尊重に傾きすぎ、教育基本法の精神がゆがめられたのである。日本各地で犯罪が増加し、機械化された生活の中で、人々はもうおおいを失つて、所謂ドライになり、人向相互の信頼が失われた。

このような恐るべき社会現象に直面して、心ある日本人は、道德教育の必要に気づき、それを強く要求するようになった」(Takeo Saito, *Philosophy of Education in Japan: in Jintun Shabai* (人本論), 1964, P. 1) このようなことから私はその講演をはじめたのであった。

敗戦直後からしばらくの間の日本の社会状態は、思想家、教育家、政治家らが、落ついて深く広くその洞察力

を發揮するには、不適切であつたであろう。私は拙著「現代人の幸福と道徳」(増訂版、昭和四一年)のなかで次のように書いた。「日本は戦後、文化國家を模範しながら、文化の原動力は何か、についてのほつきりした哲學をもたなかつたのではなからうか。これは政治家ならびに哲學者の怠慢であつた。健全な力強い文化は何を源泉の力として生まれ育つか、これが現在哲學の最大の関心事でなければならぬ。そうでなければ、いたずらに生ずる諸悪の枝葉末節を刈り取ることには終始するであらう。」(同書一四二頁)實際私も、文化の原動力について深く考へさせられたのは、三年前の歐米出張においてであつた。「諸國の民情氣風に直接して、それとなく全体的に私を襲つたものは、その國々の活力であり、精神力であつた。發展途上にある國の人々の心構へ、意氣、氣分といったものが、他の國々と違つたものをもっていることに、私は強く胸を打たれた。」(同上)そして、「學說よりも、読書よりも、すぐれて尊いものは、異國の現地における深き感動である。」(拙稿「文化の原動力」、「道徳と教育」オ七四号、昭和三十九年七月、二五頁)と、私をして叫ばしめた。「文化の原動力」のウイジヨーン(同上)こそ「私のこの研究旅行で学びとつた何よりも大きな収穫であつた。」(同上三一頁)

私は、文化の創造發展の原動力は何かを、現代文化ないし教育の最も重要な問題として、世に訴へ、世人がその重要性をはつきり意識すること、自覚めること、を一般に要請したい。

文化の創造發展の原動力をたずねるとき、直ちに問題となるものは、文化の時向的變遷の現実である歴史の意匠であり、そして創造發展は「進歩」という概念に關連するから、それは「歴史における進歩の概念」に直面せざるを得ない。世界觀・人向觀の相違から来る歴史の多様性と、それに対応する進歩に關する様々な見解とに直面して、誰でも一義的に文化の原動力はこれに限ると言い切ることとは不可能のようにみえる。しかしそのことを念頭におきつつ、私は、私の知識と体験ないし感動とを通して、他人と語ることを、無意味とは思われない。なぜなら、こうすることによってのみ、人向は相互に交わりえて、互に覺醒し合うことができるであらうからである。

二、文化の原動力は何か

(3) 文化の原動力は様々な側面から考察しうるであらう。

(6)

(一) 立志 本居宣長は「主としてよるところを定めて、かならずその興をきはめつくさんと、はじめより志を高く大に立て、つとめ学ばべき也」(「うひ山小み」)と言い、「すべての学問は、はじめよりその心ざしを高く大きに立てて、その興を究めつくさずはやまじと、かたく思ひまうくべし。此の志よわくては、学向す、みごとく、倦み怠るもの也」(同上註(ハ))と言う。これは「少年よ、大志を抱け」というクラークの言葉と同じく文化の原動力は志の高大にあるという意味をもつ。

(二) 有限性の自覚 人間の時間的、空間的存在の有限性、能力の有限性、認識の有限性、時機(チャンス)、一時に一事等の自覚、すなわち「有限なるが故に能力も時間も極めて貴重であるという自覚が人をして奮起せしめ、安閑として空しく日を送ることを避けしめる。少年若い易く学成り難し一寸の光陰軽んずべからず、時は金なり、何時までもあると思ふな親と金、等の如き言葉は陳腐なりとして笑ってはならぬ。これらの言葉は皆人生の有限性の自覚からの能率向上の教を示すものと解さなければならぬ」(拙稿「能率を上げる人生観」「現代人の幸福と道徳」一〇五頁)

ヘーゲルも「小論理学」において、悟性の有限性について次のように述べている。「理論の領域におけると同じように、実践の領域においても悟性 *Verstand* は欠くことのできないものである。行為するには、あくまで性格が必要であるが、性格をもつ人とは、一定の目的を念頭に持って、それをあくまで追求する悟性的な人である。何か偉大なことをしようとする者は、ゲーテが言っているように、自己を限定することを知らなければならぬ。これに反して、何でもなしたがる者は、実は何も欲しないのであり、また何もなしとげない……。かぎられた境遇にある一個人としてひとかどのことをなしとげるためには、人は特定のことを固く守って、その力を多くの方面に分散させてはならない」(Hegel, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften*, § 80)

以上のように有限性を自覚して生きることが、文化の創造発展のためには、必要なことである。それは、有限性の自覚が、却って、有限な存在において自己の全力を発揮する決意を生ぜしめるからである。

(三) 活力 如何に善良な性質、性格をもっている個人ないし民族、国民も、活力がなければ文化は進展しない。現代は文化の原動力の何たるかを改めて問う必要を予感しているかのようなのである。それに關する若干の例を次

に示そう。

ホストン大学の教育哲学の教授フレッド・ベネルド (Fredson Bernald) は「力としての教育に

(Education as Power 1965) を書いており、それにあざめられた日本での講演を私は昨年東京

教育大で聞いていたが、その力というのは、手先の技術的な力に止まらず、人間生活の現実にとって力となる

ような力、すなわち広い人生の諸領域 (生活、文化の全般を促進する力のことである。これは「世界文明」

(World Civilization) を志向し、科学技術、宗教、政治、経済、人間関係、芸術の全文化にわたる

世界的視野において、しかも精神的なものを深く求めて、再構成主義 (Reconstructionism) の名の

下に、積極的に文化を統一的に構成せんとする彼の、力とは総合的な文化の原動力に他ならないのである。そ

は暴力では決してない。

「生きる力」(Die Kraft zu Leben, Bekannntnisse unserer Zeit, C. Bertelmann Verlag,

Gitaraker, 1963) という本には、S. ラダクリシエナン、O. F. ホルノウ、M. フーバー、K. ヤス

パース、G. マルセル、A. シュヴァイツァーら国際級の人々二十人の論文が収められているが、それらはすべ

て、出版者によって提出された同一の問題、すなわち「現代における人生上の諸問題や種々の要求を、解決し温

かさせるための力を、あなたはどこから個人として取り出しているか、又どこからあなたの学問或はあなたの社

会が、それを取り出しているか」(ebd., S. 7) に、それぞれ答えているのである。ヤスパースの場合は、彼の

包括者思想から、彼の父母のことや、彼の知識欲・真理への愛や、大学の理念や、彼の夫人との愛や、真の友人

との交わりや、偉大な人々——例えばマックス・ヴェーバー——との交わりや、政治的自由の理念や、生命力や

宇宙的信仰ともいふべきものの幽眼などについて、彼の生きる力となったものを述べており、最後に愛に基づく

強健的な実存の交わりをなす人間に彼の信頼がおかれている。(拙訳、カール・ヤスパース「生きる力」(「実

存主義」オミニ号、昭和四〇年七月、五三頁—六三頁参照)

要するにこの「生きる力」の問題にすることは、文化の原動力をたずねる現代の要求の一つの現われである。

ヤスパースの「希望の力」(Kraft der Hoffnung) をふくむ十人の論文集

「現代の希望」(Die Hoffnungen unserer Zeit, Piper, 1963) は、「心情 Gemint

(8) から、希望によって目ざまされる、力も生ずる。心情のかかる力はわれわれの行動の用意を規定するのみならずそれはまた、多くのわれわれの動因を給する発動機 *Motor* の如きものである。「(Ebd., S. 7) といふ。「われわれの諸々の希望によって動員される力をわれわれが意識するための助けとなる」(a. a. O., S. 8) ことをめざしてこの本が刊行されるという。この本の編集責任者ヨハネス・シユレマー (Johannes Schlemmer) の趣旨にそつて、十人の、哲学、医学、キリスト教、神学、政治学、共産主義、社会学、物理学、生理学、生物学の学者のそれぞれ側面からの、論述から成つてゐる。これも深い心情から発する希望が文化の原動力であることを示唆するものと言ひうるであらう。

ホルノウは、ハイデッガーが人間の存在 (Das Sein des Daseins) を *Sorge* (関心・憂慮) とする (Martin Heidegger, *Sein und Zeit, vor allem im 6. Kapitel des 1. Abschnitts, S. 180 ff. und im 3. Kapitel des 2. Abschnitts, S. 301 ff.*) のに反対して、希望 (

Hoffnung) をゾルゲの根拠であり、希望がゾルゲよりより根源的、*wesungelicher* であり「希望の地平においてのみはじめてゾルゲもまた正しく理解される」(Otto Friedrich Bollnow, *Neue Geborgenheit* 1955, S. 1-4) という。時間性をその意味とする、人間存在の全体構造たるゾルゲよりも、従つて現存在 (人間) の根源的本来的指示性としての不安 (*Angst*) よりも、希望の方がより根源的である、とするホルノウと、私は一九六三年にテュービンゲンで、そのことについて論じたことがあるが、私は必ずしもホルノウに賛成しない。むしろハイデッガーに与するものである。しかし、人間の営為の原動力として

ホルノウが希望を、人間的ゾルゲを超えたものから来るものとして、みていることには、現代文化の向題を考へる上に、大きい意義を有するものと思われる。

希望はたしかに文化の原動力としての活力の源泉となるものである。アメリカのミネソタ大学学長 O. M. ウイルソンも「希望と抱負 (向上心) とは活力の主要な源泉である」

(*Hope and aspiration are the chief sources of vitality*) と語つた (O. Meredith Wilson, *What Is the American University?*, Forum University Series I, p. 9)。

希望はしかし、それが安易なものであったり、夢想的なものであったり、欺瞞的なものであったりするときは無力である。眞の希望は厭世観やニヒリズムを通り抜けた、それらを克服した不屈の進取的なものでなければならぬ。単なる楽天観は雑事に際してもろい。廃墟においても、挫折しても、失敗しても再三再四立上る不撓の精神、そして眞理や正義への不断の勇氣、矢われざる自信、こういうものが伴った希望がはじめて活力の源泉として、文化創造の根源の力となる。「人は如何に苦しくとも生き抜かなければならない」といふ不動不抜の人生観こそ、活動力の源泉である。それこそ能率向上の根本条件である。この人生観から勇氣も出てくるし忍耐力も出てくる。単なる楽天観はややもすれば輕薄になり、その場かぎりで重みがなく、ほんとうに責任をもって歩まなすには足りない。だから私は簡単に、楽天観をもて、そうすれば活動的になり能率が上がるぞ、とは言わぬのである。苦勞をつぶさになめ、苦勞を覚悟している人が、厭世観を通り抜け、それでも尚お勇敢に人生を生き抜こうとするような人生観こそ、ほんとうに世のためになる活動をなさしめるものだと思う。それ故私は厭世観の克服という言い表わし方をするのである。」(批著「現代人の幸福と道徳」一〇三頁)

厭世観を克服した活動的な人生観の根源になるような希望は、信仰乃至不動の信念に支えられなければならない。このことについては後述するであろう。一先ず私は、以上の個人的ないし主観的な文化促進の動因から眼を転じて、社会的・客観的・歴史的な側面から、文化の原動力を探ることにしよう。

(四) 自由と必然との緊張

(1) ランケ (Leopold von Ranke, 1795—1886, 1834 Berlin Univ. の Prof.)
においては、人間主体の自由と社会的時代的な必然との闘争によつて、歴史が、すなわち文化が進展するとみる。彼の「近代史の諸時代」(Ranke, *Über die Epoche der neueren Geschichte*)
に対するドゥエ教授 (Afred Dove, 1844—1916) の序言に引用しているランケ六〇才代の手記によると、「歴史は自由の舞台をたどるものであつて、そのことこそ歴史が最大の魅力をもつて有するゆゑんでなくてはならない。しかしながら自由には力 *Kraft* がともなう。しかも原初的な力 *ursprüngliche Kraft* がある。この力なくしては、自由は、現実におつても理念の世界においても、おしまひになつてしまふ。」

Ranke, *Weltgeschichte*, Bd. 8, 1921 (S. 166) この力は、単に個人の精神的・身体的な力な

いし活力に止るものではなくて、歴史における必然である。「時々刻々、新しき何物かが *etwas neues* はじまる」(*ebd.*)、すなわち、或る新しい何物かはらゆる瞬間に開始しうるといふ、歴史における創造の可能性こそ、人間の自由な歴史性の表現に他ならぬ。高坂正顕氏は、「歴史は単なる水の流れのようなものではなく、常に問題とその解決の錯綜である。歴史も一種の出来事であるにせよ、主体を媒介した出来事である。」(高坂正顕「人間像の分裂とその回復」二二頁)、というが、この「問題」は、主体たる人間との係わりにおける必然であろう。

「自由のかたわらに必然がある。必然とは、すでに形成せられたるもの、抹消しえざるものの中にある。それはあらたに出現してきたる一切の活動の基底である。成れるものが、成りつつあるものとの間に関連を構成する。」(*Ranke, ebd.*)「かかる仕方互いに——時間的な前後関係と空間的な並列関係とにおいて——結び合わされた出来事の一連の長い系列が、世紀 *Jahrhundert* を形づくり時代 *Epöche* を形づくる。」(*ebd.*)「しかしらば、時代の相違はどこからできるか。それは自由と必然との対立の疆いから *aus dem Haupt der gegenwärtigen Freiheit und Notwendigkeit* (異) た時代と状態とが現出するからである。」(*ebd.*)「このように、自由と必然、ないし未来と過去との対立関係の緊張の仕方によって、時代の状態の様々な相違が生じてくるとランケは言う。

「各時代は神に直接するものである」(*Jede Epoche ist unmittelbar zu Gott. Ranke, Weltgeschichte, Bd. 8, S. 177*)として、ヘーゲルの史観(指導的理念の定立

反定立、総合の論理的過程とみる)に反対して、世界史を「もろもろの世紀の大局的な諸傾向を識別し、そしてこれらさまざまなる傾向の複合体にほかならない人類の大歴史」(*R. G. S. 178*)としたランケの世界史の統一の理念には、その時代その世紀における自由と必然との闘争の中に、それぞれの文化の創造と進展とが可能であるといふことが、必然的に意味されていると云いうるであろう。しかも、必然も主体の自由を媒介しての必然であり、この必然と闘争することは人間主体の自由であるから、この両者の闘争は、根本においては人間主体の自由であり、この自由が旺盛なる活力をもつ時、永遠の価値ある文化を創造しうる、と云うべきであろう。

(四) トインビー (Arnold Toynbee, 1889—) においては、文化は挑戦に創造的に服従す

ることによつて成長することになる。彼にあつては、歴史の単位は時代でも国家でもなく又地域でもなくて、
具体名をもつた個々の文明 *Civilization* である。この文明は、社会的・文化的統一体であり、この文明
という統一ある實在が世界史を構成する単位である。彼は二十一ないし二十三の文明を数える。そして、(1)発生
(2)成長、(3)挫折、(4)解体、(5)死、という五段階を各文明がもつのであるが、文化の原動力の考察のためには、ホ
この段階である「成長」 *Growth* の段階を中心として、他の段階を合わせ考へることが必要である。今その
詳論のいとまはないが、主題に關して若干の考察をなさねばならない。

文明が誕生し成長する根本条件は、「創造的少数者」によつて、文明がひきこられるということである。大
衆は、少數的指導者の創造力に魅せられて、それを模倣する。内外のさまざまに、この文明の直面する障害の挑
戦に対して、指導者は創造的に応答して解決してゆく。成長はつぎつぎになされる挑戦に創造的に応答(応戦)
する限りつづくのである。トインビーは挑戦 *Challenge* と応戦 *Response* という心理学的術語 (*Chal-*
enge は刺激 *Stimulus* 応戦は反応 *Response*) を用いて文明の成長ないし生成消滅を説明してい

る。刺激と反応の形式のみで文明論は取扱えるか、という疑問が生ずるのである。創造力は少数者だけにある
のか、という疑いも当然生ずるのである。ヤスパースも「デモクラシーの特徴は、人々が少数者を尊敬するとい
うことである。最良のものが少数者のうちにあるということとは稀ではない。」(*Jaegers, Philosophie*
and World, 1958, S. 74) というように、すぐれた少数者の創造力は認められなければならないとしても、
世々とも創造の地盤は少数者と大衆との緊張関係から成り立つものと考へるべきである。そしてトインビーが
オリシヤ文明を典型として、文明の成長を論じているところにもその論の制限があることである。

それけともかく、挑戦と応戦は刺激と反応である。刺激の過大も過小も不十分な応答(反応)を促すにすぎな
いという心理学的知識がトインビーでは率直に應用されている。「もつとも刺激を与え得る挑戦とは激烈性の過
度と不足との間にある中間度 *mean degree* の挑戦である」(*Toynbee, A Study of History, Ibid.*)。最適度の挑戦は
Appropriateness *by P. C. Snowball, 1960, P. 187* (Ibid.)。最適度の挑戦は

刺激されたものを次第に弾力のある応戦へと刺激し、進歩させるものである (*cf. ibid., P. 187*)。
トインビーは言う。「もし発生というものが成長を伴うとすれば、混乱より均衡の回復へとむかう単一の限定

(12)

された運動では不十分である。そこで運動を反覆的な回帰的リズムに変化させるには、そこに一つの「エラン・ウイタール」 *élan vital* (ベルクソンの言葉を引用するならば) がなければならぬ。(Ibid.) と。
二の生命の飛躍・躍進、「諸文明は、挑戦より応戦を経て更に次の挑戦へとみちびく一つのエランを通じて形成するものの如くである」(Ibid., p. 189) といわれる *élan*、これこそトインビーにあっては文明の原動力とみられるものである。

以上において、私は、自由と必然との緊張関係による文化の創造発展の原動力を、ランケとトインビーとを例として、歴史的側面から簡単に考察したが、そこでは結局、必然に対する自由のたたかいが文化の原動力となる、ということを見た。この自由は信仰(信念)によって支えられ、空想によってその創造の翼をはばたくようにさせられ、危機によって覚醒させられ更にそれらは真理を愛する精神(主体的真理)に基づくのである。極めて簡単に、今はそれらに言及するに止めなければならぬ。

(五) 信仰(信念)と空想と覚醒

信仰は希望を可能にし、立志や有限性の自覚を生ぜしめ、文化の各方面に活力を与えたことは、多くの歴史的事例によって証明しうることであろう。信仰の力によって、生きる根柢を獲得している個人ないし民族は、日々の努力を不屈のものとしたのである。

コラール (Luis Diego Del Corral, 1911 ~, Madrid Univ.)

の政治経済学部教

授は、その著「歴史の運命と進歩」(小島威彦・鈴木成高訳、未来社、一九六二年、以下の引用はこの訳書による)において、ヘブライ人は未来へと向い、「希望と努力は目的へ、終末へ、神の国の到来へと強く向けられている」(七八頁)のであるとし、「この救済への熱烈な希望の感情が人類の前進に拍車をかける」(八一頁)のであり、各々のキリスト信者は「神の国の勝利のために力をかさねなければならないのだ」(同上)と言う。このように、信仰に基づく希望が文化の原動力なのである。

この場合信仰は特定の宗教的信仰だけに限定する必要はない。確信・信念と呼ばれるものでもよい。例えば、カント哲学という文化が、カントの「理性の力に対する不動の信仰 *der unerschütterlichen Gewissens an die Vernunft*」(W. Windelband, *Die Geschichte der neueren Philosophie*, II, S. 3)

という彼の生きた信念によって生まれたものである。

し、ヘーゲルも彼の「歴史哲学講義」の中で、学生に対して「理性に対する信念〔信仰〕をいだいて」(mit dem Glauben an die Vernunft)、理性の認識に対する要求と渴望をいだいて

て、世界の講義に臨むことを希望する(Vgl. Hegel Sämtliche Werke, Göttingen Bd. 11.: Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, S. 35—36)

、上言っている。これら理想主義の哲人たちだけでなく、如何なる立場の哲学者でも、又哲学以外の学者でも、宗教家は勿論、教育者でも、実業家でも、政治家等も、皆確かなる信念によってそれぞれの文化の領域において創造発展の道を歩み得たと言ふことができる。希望も使命感もこの信仰、信念から来る。

又、空想は創意をふるいたたせ、着想を生む。パスパー入は「哲学的自伝」において、一定の計画と指導とをもって行われる研究は「たえず何か別の要素が働きかけて初めて成功するものである。そういう要素は夢みること das Träumen である。私は、風景や、空や、雲に見入っていた。しばしば私は、何もなすことなしに、坐りこんだり寝そべったりした。空想 Phantasie の変幻自在な動きに精神の安静を求めること、これなくしては、各個の研究に目的と意義と充実とを与える精神のはずみも、貫き通すことはできないのである。日々ひとときたりとも夢みることをしてしない者にとつては、あらゆる仕事も日々の営みもそれによって左右される運命の暈は、その輝きを失うのではないか、と私には思われるのである」(papers, Philosophie und Welt, S. 317—318)と言っている。

(13) 覚醒について——危機の体験の自覚が文化の原動力の一つとなる。コラールは言う。「オルテカが知的好奇心に目覚めたのは、ちようと、自国が重大な危機に遭遇した瞬間であった。スペインが米西戦争に敗れ、キューバ、アエルト・リコ、フイリピン群島等、最後の海外領を失ったのは、オルテカが十五歳の時であったが、この事件は、国民の意識に強い衝撃を与えた。……この悲惨な体験は、彼等を反省へとかりたて、責任感を呼び覚まし、感受性を鋭敏にした」(コラール、同上書一ハ〇一—ハ一頁)と。そして、オルテカがウナムから受けついで「特殊な遺産は、スペインの歴史と社会の意義に対する、深く強烈な関心景慮であり、自国の生活様式を改善しようとする燃えるような熱意であった」(同上—ハ二頁)のであり、「この関心と憂慮こそ、後のオルテカ哲学

の眞の根底となり、原動力となるものである」(同上)、とコラールは言う。オルテガ (*José Ortega*
y Gasset, 1883-1955) についてのコラールのかかる見解は、危機による覚醒が文化活動の要因と
 なることを示すが、シュペングラーもトインビーも、オーストリア、オーストリアの世界大戦を経験した時代に生まれなかつ
 たならば、「西欧の没落」も「歴史の研究」も彼らは書かなかつたであろうことと考え合わせるとき、それはも
 っともなことと肯定されるであろう。しかし人は危機の体験だけで、直ちに文化活動を旺盛になすとか、創造的
 活動をなすとかは言われえない。眞理を求める情熱をもって事に専念する人だけが、危機の体験を深く自覚的に
 生かしているのである。

(六) 眞理への愛——主体的眞理

上述の(一)から(五)まで、すなわち、立志、有限性の自覚、活力ないし希望、自由と必然との緊張・闘争、信仰と
 空想と覚醒という、文化の原動力として考えられるものはすべて、眞理への愛ないし人向自身の眞理である主体
 的眞理に基づくのである。

上述の諸契機について考えるに、立志も有限性の自覚も、信仰、空想、覚醒も、みな活力すなわち文化創造の
 活力に集中する。文化の成長ないし進歩は創造なしには不可能であり、創造は飛躍エウロなしには不可能である、すな
 わち活力なしには不可能である。しかしこの活力たる生命力・活動の根源としての元氣・氣力、がむしろな突
 進力、ヘーゲルが世界史の偉大な事業は情熱なしには成就されなかつたという場合のような情熱、そしてそれら
 さが可能にする上述の諸契機は、眞実な人向の自由なしには、その正しさを保ちえない。そしてその自由も、眞
 るものをどこまでも純粹に求めようとする愛、しかしすべてのものを本来の姿で生かし育てようとする愛なしに
 は成り立ちえない。眞の文化はかかる愛という人向主体の眞理なしには正しい姿で創造もされなければ、進展も
 しない。以上のことを体系的に分析し総合すると次のような構造となるであろう。

すなわちそれは、眞理↓自由↓立志・有限性の自覚・厭世観を克服した活動的人生観・希望・抱負・信仰・空
 想・覚醒等↓活力(飛躍・躍進)↓自由と必然との闘争・挑戦と飛越↓文化の創造↓文化の成長・発展、となる。

このような構造関連を背後にもつて、私は簡潔に、文化の原動力は、眞理を愛する情熱に基づく道義的エネルギー
 キーである、というのである。かかるエネルギーすなわち活力は、単に主観的・個人的なものとしてではなく、

社会的・歴史的なものとして尙くとき、それは必然的に、過去のなもの・必然的なものとの緊張・闘争の關係に立たざるをえない（ランケ）、すなわち挑戦と飛越との關係に立たざるをえない（トインビー）。自由な活力が必然の現実と対立闘争する緊張によって、はじめてそれは具体的な活力となり、文化創造の原動力となるのである。

三、人間形成

人間形成は、教育といつても、陶冶といつても、教養といつてもよい。ここでは、主として、人間そのもの、人間の主体、ないし人間の根本的態度、人格の形成について述べる。人間そのものといつても、人間は社会なし世界・歴史・文化・生活のすべてとの關係においてあるものであることは言うまでもない。

形成は従来、内的・主観的な側面を強調するもの（A）と、外的・客観的な側面を重視するもの（B）とに傾いてきた。

A……個人の性能の完全円満な発展、素質の展開、自発性の尊重、個人の重視、自由の尊重、個性の重視、自治協同の理念、などの強調。

B……社会的教育、社会の要求、文化の伝達拡充の担い手の育成、社会的国家的伝統の權威の重視、統制なし劃一教育、社会的理想の型にはめる教育、などにその特質が示される。

われわれは、この二つの類型の一つにとらわれずに、人間そのものの本質から、特に文化の原動力は何かという考察から、人間形成を考えなければならぬ。

結論的に言えば、人間形成の目標は、文化の原動力を養うことである。それは、文化の原動力たる、眞理を愛する情熱にもとづく道義的エネルギーを、被教育者に強化することである。

人間形成は、しかし、社会における、時代におけるそれであるから、現代という時代の課題を離れては、抽象的たるに止まる。

(15)

現代は科学技術の時代といわれるが、その課題は、高い精神（私はこれを絶対愛と呼ぶ）による、科学性と精

神性との統一である。(拙著「現代人の幸福と道徳」特にその第五章現代における人間の生き方、参照)。

この絶対愛こそ、真理(主体的真理、根源的真理)であり、この根源的真理に基づいて、外的合理的実証的な科学性という真理と、内的精神的道徳的な精神性という真理とが、はじめて可能となる。

かかる真理を愛する情熱をひきおこし、目ざまし(erwecken)、この情熱と共にある道義的エネルギー(活力)を養ふこと、教育の根本目標でなければならぬ。

私が欧米に出張して、先ず感じたことは、彼の地における真理への熱意である。特に、教々の大学における雰囲気、学生の教室等における態度は、日本の大学におけるよりもはるかに真理愛において強い。

どうして欧米においてこのような雰囲気が生じ来ったか、われわれは歴史的社会的に、その原因をさぐって开ようとする意識を先ずもたなければならぬ。そのためには、ギリシヤ古代以来の文化史を哲学、宗教、芸術等にわたって顧みることとを必要とするであらうし、ヘブライ、キリスト教的精神の根源からその後及び宗教思想、道徳思想等を学ぶ必要がある。

又われわれは、東洋ないし日本における先哲の真理愛を、現代人は忘却しているのではないかと、自問しなければならぬ。それらの大哲人たちの根本理念、根本的精神態度に学ぶところがなければならぬ。

すべてをそれぞれの本来的性において真実に生かす公明な愛が人間の根源的真理である。かかる愛とそれに基づく理性とへの信頼が、真の勇気を生ぜしめる。この勇気が自由と平和とへの努力の原動力となる。かかる勇気によって文化創造が可能となる。それ故、かかる愛、理性、勇気に信頼をよせ、それを愛し、それを求める熱心さが、文化の創造進展を促す活力を生ぜしめる。かくして理性も勇気も情熱も活力も根源的真理たる高い精神たる愛にもとづく真理の諸相として、真の文化の進展の諸動力となる。かかる愛、理性、勇気、情熱、活力を愛し、尊重することは、総じて、真理を愛する情熱にもとづく道義的エネルギーを尊重すると言うことができる。

文化の原動力の根源に培う教育は、それ故、幼少の時から、すなわち、幼児、園児、児童の頃から、真実をそのものとして愛する情熱を植えつければならない。そうでなければ、教育は、単なる方便としての知識技能の教育に終って了うであらうし、使い易い、受動的な、機械的な自動人形を形成するに止まるであらう。あらゆる学校ないし教育機関において、このような真理を助長啓発覚醒するに役立つ教材ないし教育内容が用意されな

ければならない。真理への覚醒。これこそ人間形成の根本作用である。

ホルノウも覚醒 (*Erweckung*) を教育上の重要な概念としている。彼はシエプランガーの「空極のもの、最高の価値あるもの、神聖なものへの、魂の深みへと到達する関係としての、内面性を自覚します」とい

かかる次元において、つとめなければならぬ」(*H. Spranger, Pädagogische Perspektiven, 4. Aufl., 1956, S. 84*) とする言葉を引用して (*O. F. Bollnow, Existenzphilosophie und Pädagogik, 1959, S. 42*)、「教育はつねに覚醒である」(*Erziehung ist immer Erweckung. H. Spranger, Der geliebte Erziehler, Heideberg, 1958, S. 17*) こと、すなわち「覚醒としての教育」を強調する (*Bollnow, a. a. O., S. 42*)。

そこではホルノウは、シエプランガーが第二次大戦以後、彼が以前から主張していた覚醒を、更に彼の教育学の中心点において主張したこと、彼は「内面的世界の覚醒」「*Jenneweltenerweckung*」において「人間となることの全く新たな次元」(*eine ganz neue Dimension der Menschwerdung*) を見たこと、を述べている (*Vgl. Bollnow, a. a. O., S. 42*)。この次元は前述の「かかる次元において」という場合の次元である。かかる覚醒はソクラテス的な、より高い自己の覚醒である。ホルノウはまた既にモンテスリー (*Maria Montessori*) においてこの「覚醒」の概念がはっきりしていたという (*Bollnow, a. a. O., S. 52 ff.*)。

ホルノウは更に「出会い」(*Begegnung*) を教育学上の問題として論じている (*Bollnow, a. a. O., S. 177 ff.*)。他者との出会いは、道徳的無垢のために、人間が自己となるために、行われる (*Vgl. a. a. O., S. 121*)。

それは、トルケッターの「交わりによる教育」(*Erziehung durch Kommunikation, Bernhard Töschler, Erziehung und Selbstein, 1961, S. 106 ff.*)

と類似のものである。トルケッターは又、本来の教育の源泉として、「歴史」と「信ぜられた権威」とをあげている (*a. a. O., S. 195 ff.*) が、彼は教育において、実存の交わり (実存的交通)、歴史、権威による覚醒を重視している。

「宇宙における最高、最深のものは、この世界の中を貫流し、世界に真の活力を興える、神秘の力、である」

(シユアランが「現代文化と国民教育」、小塚新一郎訳、昭和一三年、岩波書店、三六頁)と言われる場合)、
 この神的な力に触れ、それに感動させられ、それを日々の活動に具現するように、被教育者を覚醒することが、
 文化の原動力を養う教育の根本となるのである。

哲学や宗教における偉大な思想家はすべてかかる神的な力ないし絶対者の感得を志して来た。「哲学の形で表
 現されている偉大な思想家達の陶冶理想は、単に首尾一貫せる思想を含んでゐるのみならず、道徳的エネルギー
 ーを持つたものである」(シユアランが、同上書、三六頁)と言われるように、人向形成において各人に主体
 の根源的真理を確立させるためには、古来の先哲の教えに耳を傾けしめなければならぬ。しかし、ヤスパース
 が、「哲学的な、すなわち、精神的道徳的な現代の教育書が全体として欠けている」(*Papers, 21. Jahrgang*
treibt die Bundesrepublik, 1966, S. 201) といふのは、一般に科学技術の教育に
 偏して、真の陶冶ないし人向形成をないがしろにしている、という現代の欠陥を指摘したものである。真の陶冶
 の理想を失へば、人類は滅亡するに至るのである。

文化の原動力たる、真理を愛する情熱に基づく道義的エネルギーを強化する、人向形成の道は、合理的実証的
 な科学性と共に、精神的道徳的な精神性をもって、行われなければならない。これは人向形成の正道である。そ
 こでは、主体的真理に基づいて、人をして、志を立てしめ、有限性を自覚させ、厭世観を克服した活動的
 をもたせ、希望と抱負とを抱かせ、信仰・信念へと正しく向わせ、創造の源泉となる空想や覚醒の重要性を自覚
 させ、かくしてあらゆる問題に対して、課題^{*}に対して、不屈の魂をもって応答する創造的な旺盛な活力を身につ
 けさせなければならぬ。かかる活力を養うことが人向形成においては特に重視されなければならない。

※「人生は課題である」(*Das Leben ist Aufgabe.*) とオルテガ・イ・カセットは言う

(*Jose Ortega y Gasset, Geschichte als System usw., S. 110.*)